

北原白秋の詩的想像力とその深層心理

笹本正樹

まえがき

ひとりの詩人が詩をつくるときに、その表現力のエネルギーは何であったか。そのよってくるよりどころは、いろいろとあることであろう。ある人ではそれが神であったり、他の人ではデモニーニッシュなものであったりする。また、言語的造形の面白さや、原始的叫びとでも言った音韻上の風変わりさもあることであろう。私は大学四年の時より、白秋系の結社に入って、約四十年となるが、そのあいだ北原白秋の創作エネルギーは何が源であるかを注目してきた。そして、その生涯と創作の関係をまとめて世に問うた（「北原白秋論」昭50、五月書房）、今回はさらに、九年をかけ結社誌に「北原白秋の芸術と深層心理」を掲載した（昭56―平1）⁽¹⁾。ここに述べるものは、その研究の一端から、北原白秋の成長期のみにつ

いて考察を深めたものである。白秋の詩的想像力は何からくるのか、そのよってくるものを追求し、確認しようとしたものである。

一 母との関係

どの人も同じであろうが、幼児においては母親との結びつきが強い。白秋も幼児期を回想して、詩集「思ひ出」のなかで故里や母を克明に歌いこんでいる。

母の乳は枇杷よりぬる温く

柚子より甘し

唇つけて我が吸へば

こそは擦ゆし、か痒ゆし、味よし

片手もて乳房圧し
もてあそび、頬を寄せすれ

肌さはりやはらかに
抱かれて日も足らず

意図ほしとこれをこそ

いふものか、ただ恋いし

母の乳を吸ふごと

わがこころすろぎぬ

母はわが凡て⁽²⁾

〈母〉

フロイドの言う、これは口唇期にあたるものである。

母との絶大なる信頼関係はこの間に養われる。そして、

白秋・北原隆吉においても、その関係は満たされ、充実したものであった。"柚子よりも甘い乳"、"枇杷の実よりもぬるい乳"とそれを表現している。「母はわが凡て」と

結んでいる。ここに嬰兒隆吉と母シケとは、一心同体で

あることがわかる。柚子とか枇杷を乳房の比喩としているところが田舎っぽくて現実感がある。"すろろぎぬ"という表現も変っている。なんとなく心ひかれる、というのである。母に抱かれていると何となく、乳房をまさぐってしまうのが嬰兒であろう。彼はこうして母との関係において幸福な日々であったが、家業の酒造りが忙しくなると、乳母の手に渡されて時を過ごした。乳母と共にすごす、あるいは添寝をもらうことが多くなつた。母の愛から遠ざかり、その代償として乳母の愛で満たされねばならぬ日々となる。弟の鉄男が生まれてからは、とくにそうである。

二 オレステス・コンプレックス

隆吉が二歳になった夏に、チフスにかかり高熱がでる。乳母シカに抱かれて寝ていたが、熱が乳母に移り、乳母シカが高熱にうかされて他界したのであった。代理の母親を、隆吉は殺したことになる。ここに母殺しの心理〈オレステス・コンプレックス〉が生じたわけである。

(アガメムノン)はトロイ戦争から凱旋したギリシヤの総大将であった。しかし、妻と家臣は肉体関係があり、

帰ってきたアガメムノンは暗殺される。その娘、オレステスは母を憎んで、弟に母を殺させたのである。長じて白秋は恋愛によって、相手を自己の情熱で破壊させる（焼き殺す）という自己暗示をもつようになる。(3)

母なりき

われかき抱き

ザボンちる薄き陰影より

のびあがり、泣きて透かしつ

「見よ、乳母の棺は往く」と

時は白日

大路青ずみ

白き人列なし去ぬ

刹那、また火なす身熱

なべて世は日さへ爛れき

病むごとに

母は嘆きぬ

「身熱に汝は乳母焦がし

また、吾子よ、母を」とー今も

われ青む、かかる恐怖に(4)

〈身熱〉

母は言う「おまえは自分の病気の熱で、乳母を焼き殺してしまった。そして、また私をもそうしてしまうのであろう」と。これは実際にそう言ったのではなからう。

隆吉が自分の熱で、また母をも焼いてしまうのではないかという恐れ、コンプレックスであったのだと思う。成人となつてから、白秋はこのオレステスコンプレックスによって、松下俊子、江口章子を破壊におとし入れてしまふ、という運命をもつ。これはいわば、白秋という詩人の心的エネルギーが、彼女たちを焼き殺したことになるわけである。心的エネルギーが峠を越したあと（リビドーの爆発とでもいふべきもの）に結婚した佐藤菊子は、この心的焦殺よりのがれることができたのである。

三 エディプス・コンプレックス

隆吉は大切に守るべき母との関係を、焦がすことになのであるが、その反対の立場の父との関係はどうだったのだろうか。いわゆるエディプスコンプレックスは強烈ではないけれど、酒に強く短気である父に対して、あ

る意味で反感をもっている。次の詩ではその傾向がにじみでている。彼は父の悪事をさぐる密偵ということになっている。

夏の日のなほ青き実葡萄のもと

わが乳母とある女子とのひそひそ話

前掛の白さ、陽の白さ

ひとりほ葱を一とかかへ抱きて立てり、なつかしく

蛇は葡萄の実をすべり

呻きて飛びつ、また去りつ

ひそかに語る一事は

わが父のこと

そはゆくりなきわが父の恋びとのこと

禿し頭のわが父の或るみそかごと

恐ろしく、悲しく、何かおもしろく

われは顫へて空気銃みがきながらに佇みぬ

子供心にわが父の

秘密きく日のうれしさは

密偵のごと小ざかしき円ら眼われと光らしぬ

ひとにな告げそ、日は真昼

われは顫へて、かの蛇の青き眼玉を狙ひけるかな⁽⁵⁾

〈密偵〉

わが父の恋人のことを、乳母と他の女が語っている。

それを空気銃をみがきながら自分分は聞いている。そして、蛇の青い眼玉に狙いをつけているのである。エディプスコンプレックスの感情は「禿げし頭」とか、「悲しく、なにかおもしろく」とか「秘密きく日のうれしさは」と言った表現に、父親に反抗しようとする心情をみることができる。

隆吉はのち中学校に入って、文学の方に関心が傾くと、父親は怒って家業を継がせるために、商業学校に進学させたので、文学書を読むことを禁じてしまう。隆吉は石垣のすきまや、砂の中に本をかくして読むが、やがてノイローゼとなって休学する。この詩は、まだ、エディプスコンプレックスの淡い時だったと言えよう。

四 去勢コンプレックス

〈あかんぼ〉

どのような人にも成長過程には、弱小感をもつ幼年時代があることであろう。この詩は弟が生まれた頃のものである。そのあかんぼの性をにくんでいる。弟に母を奪われたとする子供の悲しみでもあろう。しかし、さらに次節では、「そのあかんぼを食べたし」と猫が近寄ってくる、と言うことになっている。弟を食べられては困る、と言うことと同時に、「ちんぼこ」を食べられては困るという、自己の去勢コンプレックスも同時に歌い込まれているのである。

昨日うまれたあかんぼを

その眼を、指を、ちんぼこを

真夏真昼の醜さに

憎さも憎く睨む時

何かうしろに来る音に

はっと恐れてわななきぬ

「そのあかんぼを食べたし」と
黒い女猫がそっと寄る⁽⁶⁾

一般に男性は年上の女性に対して、この去勢コンプレックスをもっているものと思われる。とくに幼少年時においては、そうであろう。隆吉はシカのあとにきた乳母に、もてあそばされた経験があると述べている、しかし、それはそんな気がしただけなのかも知れない。いずれにせよ、この早熟で、性的エネルギーを多量にもった子供は、五歳で隣家の娘さんを恋して、失恋するに至る。そして、煙草を好きになり、銀ギセルをくわえては、プカリプカリと煙をくゆらせて、大道をいったと言う。それは失恋をまぎらわせるものだったにせよ、大胆にして風変わりなところのある、天才児であったと言えよう。彼は、性の芽ばえは五歳だったとしている。

五 ファロスの玻璃

この詩は「パン」の会に歌われたものである。白秋は親友、木下李太郎の提唱した芸術家たちの集まる、このパンの会に加わっている。そして、人々が集まると白秋の「空に真赤な」の詩を合唱したという。

当時の木下李太郎の日記をみると次のように記されて

いる。(7)

明治四十二年、三月十三日 土

五時半神田安田旅館にルンプ、フリッツを訪ねる。

一緒に「パンの会」にゆく。既に石井、山本、北原

倉田、吉井あり、やがて田中松太郎氏来る。其後、

萩原守衛、遙の後に島村。

私は白秋の長男の北原隆太郎氏のところを訪れたとき

(その頃は、母堂菊子さんも健在だった)に、この詩の歌い方を教えられたが、何かズンドコ節に似ていると思つた。

空に真赤な雲の色

玻璃に真赤な酒の色

なんでこの身が悲しかろ

空に真赤な空の色⁽⁸⁾

〈空に真赤な〉

ここには明治の青春が溢れている。玻璃はピンである。ピンに真赤な酒の色というのは、自分の身体に充ちあふれる情熱であり、精神分析で言えば、赤いファロスのことであろう。いや精子のいつぱいつまったファロスというべきかも知れない。“悲しかろ”と言っているが、それ

はあくまで反語である。実際には異性を求められないものがなしさもあるのが青春というものであろう。

夕方の空に浮かぶ真赤な雲は、女性の頬のいろとも言えようか。それとも微笑であろうか。いずれにせよ、血気さかんな若者たちが青春の情熱をもてあましていると同時に、どこかもの悲しさがあると言える。

六 草のマスターベーション

鉛筆や洋傘がファロスを暗示したものであることは、精神分析の説くところである。⁽⁹⁾ この短歌もそうしたものの典型と言えるのではなからうか。

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり⁽¹⁰⁾

精子は白いから、これはマスターベーションではないのではなからうか。ここでは“赤き粉のち散るがいとしく”となっているのである。しかし、それも血の一種であるということから考えれば、こういう場合はマスターベーションの心理と解釈してもよいのではないかと思う。

ここには自己愛がある、赤い色鉛筆の背景には、草わかばの上に横たわっている自己がある。草だけでなく、みずからも若いのである。

この鉛筆は作者に詩を書かせるものである。そして同時に、赤いファロスこそが、彼に詩を書かせるに至るところの根源とも言えるのである。ペンは平和のときも剣でもあり、剣は男性のシンボルでもあったのだ。

ジャック・デリダに「尖筆とエクリチュール」という本がある。ポストモダンの旗手であるこの学者は、次のように述べている。

「もしも尖筆が（ペニスがフロイトによれば「呪物の通常の原型」であるだろうように）男であるとすれば、エクリチュール（書かれたもの、書記行為）は女であるだろう」⁽¹¹⁾

ここでは尖筆は男性の役割を、紙は女性の役割をシンボライズしていると述べているのである。その意味では「書く」ということにおいて、尖筆の側に男性的快楽はあり、紙に書かれていく、文字の側に女性的快楽は昇華作用として働いていることになるのである。

七 深海の欲望

これは白秋二十歳のときの作品である。森鷗外の観潮樓の会に招待されたとき公表したもので、鷗外をして「豪傑」といわしめた作品群のなかにある。

深海の底に魚然ゆいな森の巨獣か赤き自動車きたる⁽¹²⁾

あまり人はこれを取り上げて批評しないが、青春の情熱あふれたフォービズムとでも言うべき作品である。そもそも一読してこれは何を言っているのか、わからない。ただ、情熱みたいなものは伝わってくる。そこには青年白秋のリビドーが満ちみちている。

しかし、これを教材にして学校で授業する先生は、どのように解釈をまとめていったらよいのであろうか。

「海の深いところに、魚が燃えているように、きらきらしていましたよ。いいえ、そう思っていたら、なんと森の怪獣だったのですね。ああ、赤い自動車がやってきましたよ」

たとえば中学校の先生が、生徒にこのように解説したとすれば、生徒は眼をぱちくりするばかりであろう。先生も実はわからないのだから、これは教材となることは

ありえないだろう。

だが、これが性的衝動の表現だったとすると、精神分析ではまことによい教材を与えられたことになる。その深層心理は、いったいどういうことになっているのだろうか。

深海の海に魚燃ゆ

〈魚〉

いな、森の巨獣か

〈獣〉

赤き自動車きたる

〈車〉

この短歌は右のように三つに区分すると、わかりやすい。性的衝動をどうやら、魚、獣、車であらわしているのである。そこで、夢判断の辞典をひいて、あれこれとみるに、次のようなことが説明してある⁽¹⁾⁽³⁾。

海||現実には、海岸は海と陸地の境界です。夢の中で

は海は女性、陸地は男性を表わし、ぜんたいとして、性的願望の表われです。

魚||男性の象徴です。ヒレは、この意味を強調します。

名まえを知らない魚が出てくる夢は、あなたが男性であつても、女性であつても、性とはどんなものかという問いに十分答えられないことを表わします。

森||遠くに見える繁茂した森はジャングルと同じように、はいりにくいところ、はいってはいけないところ

ろとして、処女を表わします。

猛獣||一般に男性の猛猛さ、恐ろしさを表わします。

たとえば、女性のあなたがライオンに追われ、逃げ口がなくなつて困つたしもう夢を見たとするれば、このライオンはあなたを誘惑しようとしている男性を表わしています。

消防車||自分の中に高まってきた欲望を早く放出し去つてしまいたいという願望を表わします、おもしろいことに、消防車というのは、ホースとか赤い色とか、サイレンなどの性的興奮のイメージと、火を消すもの、つまり感情を静めるものという正反對のイメージが重なりあつています。…つまり放出すれば静まるのが、人間の感情や欲望のつねだからです。

このようなわけで、“深海の底に魚燃ゆ”は女性とのロマンチックな性愛の夢であり、“森の巨獣”とは女性との激しい性交の夢想であることがわかる。そんなことをあれこれと考えているうちに、情念が高まつてしまつて、私は赤い消防車のように、ポンプから液をはけなくなつてしまつた。すなわち、性愛の激しくも孤独なナルシズムの祭典である。これは彼の青春の一つの金字塔、記念すべき作品であつたと、私はみている。

八 熟れた麦の穂

南風が吹きあげる

やれやれ、今朝も朝っぱらからむんむんするだぞ

何でも構ふこたねえ

胸をづんと張りきってな、うんとかう息を吹ひ込んで

見るだ

熟れ返った麦の穂がキンキラして

うねったり、凹んだり

扁平たく押つかぶさると

阿魔女でも、何でも、はあ、庄っ倒してやったくなる

だあ

真赤なお天道さんが燃えあがる

雲がむくむく焼き出す

狂ひ出すと一吃驚しただが

畔の仔牛が鳴き出す

わあといふ声にする

村中で穀物を抜き出す

どっとして居らんねえ

俺ちも豆でも撈るべえ

赤ちゃけた麦と蚕豆

ぐんぐん押しわけてゆくてえと

たまんねえだぞ…素っ裸で

地面にすっかり足をつける、うんと踏んばる

まん丸いお天道さんが六角に尖って

四方八方黄色に光り出す

そこで、俺も小便をする⁽¹⁴⁾

〈崖の上の麦畑〉

ここでは性欲は明らかに対象をもとめていることがわかる。麦の穂がうねったり、凹んだりというところに性の対象を求めていることがわかる。それらは「赤ちゃけた麦と蚕豆」で女性の「性」を暗示させようとしている。太陽が六角になってしまふというのは面白い。これは同時に自分の頭が六角になってギスギスしてしまふことであらう。その太陽は赤く光るのではなく、「黄色に光り出す」のである。白秋は性欲が異常をたたすとき、あるいは狂気に走りそうなときに、この黄色を使っている。これは彼における危険信号でもある。(例、病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出)

病的になるときにこの色が現われる。

白秋のその生涯の詩を展望すると、色彩は次のような順序で変化し、彼のリビドーと関連しているのである。

青―紺―赤―金―白金―銀―白―黒

ただ、この系列に入らず、不意に黄色がでてくるときがある。“黄色”は彼にとっては性欲を抑えきれず、極度にもの狂おしくなった時にあらわれる。人妻と関係があったとみられる詩（「真黄色」）にもこの色彩があらわれたのであった⁽¹⁵⁾。

九 なら坂の性

次の歌は性対象との交渉があったあとに歌われたものとみられる。リビドーが弱まって、カタカナの表現とになっているからである。

コロガセ、コロガセ、ビール樽

赤い落日ノナダラ坂

トメテモトマラヌモノナラバ

コロガセ、コロガセ、ビール樽⁽¹⁶⁾

〈ビール樽〉

（宮沢賢治の詩においても、カタカナ表現となったところは、彼のリビドーの衰弱を示している。例「雨ニモマケズ」）

ここでビール樽は罌丸を暗示している。そしてなら坂は、女坂でもある。デカダンな表現であると言える。言わば「空に真赤な」という詩とは、対極にあるものである。性エネルギーの上昇期にあった気分のものと、その下降期の気分を歌ったものの差である。

「とめてもとまらぬものならば」というところに相手の女性との運命共同体というか、なりゆきにまかせてしまふ、という心理が入っている。人妻（松下俊子）との恋愛事件で獄に入った白秋は釈放されて、あらためてその女性を探しだし、正式な結婚をしたのだけれど、それがやがて不幸な結果となるのであった。

この「ビール樽」には、その結婚とゆくさきもう「どうにでもなれ」とする気分がこめられているように思われる。

一般に精神分析では、俵は穀物をつめこんだ袋であって、穀物は精液を連想したものとされる。そうしたこともあって、俵は罌丸ということになる。また、坂はそれが上り坂の時は性的興奮の高まるさまであり、下り坂

はそれがさめるときにさまだと言われる。ここではそうした意味で、愛するものを獲得したあとの飽和感があるといえよう。

十 円光のリビドー

光リカガヤク円ヒラキモノ

アタリマバユクフリカヘル

光リカガヤク円ヒラキモノ

アタリマバユク目ヲツブル

光リカガヤク円ヒラキモノ

光リ澄ミツツ掌テヲ合ス⁽¹⁷⁾

〈生命〉

姦通罪ということ、共に入牢したというと暗いが、それほどに憧れていた美しい人妻とあらためて、正式に結婚できて、二人は性の饗宴に入る。それは作品「白金の独楽」に表現されている。それはプラチナ色に極まったコマの「動中静」の人生のリビドーの最頂点でもあった。ここで「生命」をうたい上げたが、それは太陽でも

あるし、魂というものでもあろう。性のきわみに満足した、その境地への感謝であった。

アト・ド・フリースの「シンボルイメージ事典」によると、「円」Circleでは、次のような解釈である⁽¹⁸⁾。

- 1、永遠、天国、完全
- 2、天球、宇宙、無窮
- 3、周期（誕生、成長、衰亡）、日輪
- 4、女性原理
- 5、王の権力（翼のついた円は、バビロン）
- 6、円周
- 7、色では青色

8、天地創造の炎の円、人間の創造的活動としての火の円

9、魔術師が霊と接する場所

10、両性具有

この中で、「人間の創造活動としての火の円」という項目がある。また「魔術師が霊と接する」のは、円の中心であるという。まさにこの円光において、白秋という詩人の魔術師は靈感をえたとも言える。（傍線は筆者によるもの。）その色彩は「白金」であった。

あとがき

ここでは「白秋全集」四十巻のなかの詩や歌から、とくに彼の性的エネルギーとかかわっているとみられる作品を取りあげ、彼の詩的想像力、ひいては詩的想像力の源泉となっているものを検討した。

彼の青春のリビドーがどのように変容していくかを、詩的短歌の表現からみてきた。文章をかくということは、彼にとっては性的エネルギーをいかにサブリメーション（昇華）させるかの問題であったことがわかるであろう。南国、九州柳河生まれの白秋は溢れるほどの情念の量の多い人であったが、それを言語表現を磨くということ、逆に芸術の世界まで到達させた。

技人や技に遊ぶといにしへは一生ひとよのいのちかけて惜愛おしみき⁽¹⁹⁾

このように彼は歌っているが、“いにしへ”のみならず、それは自分のことでもあった。彼は言語使用の技によって、狂気に走りそうな性欲を抑えて、豊かな詩的作品を形成したのである。その情念の世界は、今や日本の近代文学を谷崎潤一郎などと共に代表して、耽美派文学の至宝である。

彼は人生の後半、子供が生まれてからは、多くの童謡をつくったが、ここでも山田耕筰の作曲とあわせて、世界に誇るべき作品となったのであった。（北原白秋百年祭の昭和六十年には、九州柳河にソルボンヌ大学より、ドミニック・パルメ女史が来て、“白秋の童謡”についての記念講演を日本語でした。なお、女史は白秋研究にて、まもなく博士号を取ることであった。）⁽²⁰⁾

北原白秋の詩的想像力の基底には、性的エネルギーと言語表現力の関係が濃厚である。ここで取り挙げた青年期はとくにそうである。中年以降は“わび”“さび”の境地をふまえて、リビドーは死にむかっていく。ここでは彼のリビドーが生にむかっていく側面の例をいくつか挙げて、深層心理について考察してみた。一般人においても生涯教育（学習）からみるときに、こうした傾向は多かれ少なかれ持っているものであろう。

註

(1) 結社誌「篋」に発表した『北原白秋の芸術と深層心理』の評論は左の通りである。(昭56—平1)

- 「夢想の詩学」昭56・1、「赤い鳥小鳥」昭56・3、「空に真赤な」昭56・5、「ビール樽」昭56・7、「邪宗門秘曲」昭56・9、「灰色の柩」昭56・11、「金柑の木」昭57・1、「薔薇の木」昭57・3、「繻子の黒」昭57・5、「出臍の小児」昭57・7、「紅きダリヤ」昭57・9、「芥子ひとつ」昭57・11、「接吻」昭58・1、「あわて床屋」昭58・3、「お祭り」昭58・5、「象の子」昭58・7、「忠弥」昭58・9、「あかんぼ」昭58・11、「木の実」昭59・1、「チョンキナ」昭59・3、「赤き粉」昭59・5、「真黄色」昭59・7、「金と酒」昭59・9、「母の乳」昭59・11、「円」昭60・1、「紅い円燈」昭60・3、「生誕百年祭」昭60・5、「ふさぎの虫」昭60・7、「酒」昭60・11、「白痴のニキタ」昭61・1、「雀考」昭61・3、「隆太郎の詩」昭61・5、「性の門出」昭61・7、「赤き郵便函」昭61・9、「深海の魚」昭61・11、「文士の筆蹟」昭62・1、「白秋の筆蹟」昭62・3、「ランプの女王」昭62・7、「父上に捧ぐ」昭62・7、「欄画」昭62・11、「麗ラカヤ」昭63・1、「風」昭63・3、「北原篋」昭63・5、「愛のまり子」昭63・7、「半菊さん」昭63・7、「浄土の門」昭63・11、「忽忘草」平1・1、「白秋陶像」平1・3、「高志の国」平1・5、「女人山居」平1・7、「砲火と山鳩」平1・9、「地球時計の瞑想」平1・11

- (1) 「白秋全集」(第二卷) 岩波書店、昭60、二七九—二八〇頁
 笹本正樹「北原白秋論」五月書房、昭50、二二頁
 「白秋全集」(第二卷) 一一八—一九頁
 右同、二九—二九二頁
 右同、一五—頁
 (2) 「木下左太郎全集」(第一卷) 岩波書店、昭54、三七〇—七
 一頁
 (3) 「白秋全集」(第一卷)、昭59、二九頁
 ジャック・デリダ 白井健三郎訳「尖筆とエクリチュール」朝日出版、昭54、二〇五頁、「ロートレアモンの有名な一句」解剖台の上でのミシンと雨傘との偶然の出会いのようによい：美しい「もこの句における雨傘で男を、ミシンが女を、そして解剖台は生と死との共通の尺度であるベッドを表わしている。」
 (4) 「白秋全集」(第六卷)、昭60、二九頁
 ジャック・デリダ 白井健三郎訳「尖筆とエクリチュール」、昭54、六四頁
 (5) 「白秋全集」(第六卷)、二一九頁
 外林大作「夢判断」光文社、昭43
 (6) 「白秋全集」(第三卷)、昭60、四〇三—四四頁
 笹本正樹「北原白秋論」、五六頁
 (7) 「白秋全集」(第三卷)、三二七頁
 右同、(第三卷)、二六五—六頁
 (8) Ad de Vries : Dictionary of Symbols and Imagery.

(20) (19)

(North-Holland) 1974. p. p.99-100

笹本正樹「北原白秋論」二四三頁

笹本正樹「北原白秋の芸術と深層心理(第27回)」「生誕百年

祭」、白秋系結社誌「篋」、昭60、5月号、三三一―三四頁